

### 根岸党の性質：「洒落っ気」という哲学

Takahashi, Sumiko / 高橋, 寿美子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

17

(終了ページ / End Page)

28

(発行年 / Year)

2009-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010180>

## 根岸党の性質

〈論文〉

## 根岸党の性質

——「洒落っ気」という哲学

## はじめに

根岸党とは、明治二十年代に東京根岸とその周辺に居住した文人の一派を指す。文士や画家を中心とする集団ではあるが、文学上もしくは芸術上の結社的意味を持つものではなく、相互の住宅の地理的条件や共通の趣味を介した交遊から生まれた集団であった。明治二十年前後より漸次形成された根岸党は、次第に文壇の一派として認識されるようになり、「根岸派」とも呼ばれるようになる。構成員は時期によって出入りがあり、証言者によっても異同があるが、文学寄りの人物としては、幸堂得知（天保一四―大正二）・饗庭篁村（安政二―大正一）・須藤南翠（安政四―大正九）・宮崎三味（安政六―大正八）・森田思軒（文久元―明治三〇）・高橋太華（文久三―昭和二二）・関根只好（文久三―大正一一）・中西梅花（慶応二―明治三二）・

幸田露伴（慶応三―昭和二二）、美術寄りの人物として、川崎千虎（天保六―明治三五）・久保田米偈（嘉永五―明治三五）・岡倉天心（文久二―大正二）・富岡永洗（元治元―明治三八）、他に実業寄りの人物として、高橋健三（安政二―明治三二）・榎崎海運（万延元頃―明治三三）・藤田隆三郎（生年、没年不詳）などが挙げられる。

根岸党の構成員のうち、露伴と天心とを除いては、現在では忘れ去られている人物といつてよく、集団としての根岸党の存在も殆ど知られていないのが現状である。例えば講談社版『日本近代文学大事典』全六巻（昭和五二年―五三年）は、日本近代文学に関する辞書・事典では現在のところ最も情報量の多いものであるが、同書に「根岸党」もしくは「根岸派」の項がないということが、その傍証になるであろう。しかしながら、実際に明治二十年代から三十年代にかけて発行された新聞や雑誌の記事、その他の出版物などに当たってみれば、彼らの多くは

高橋 寿美子

数々の作品を発表し、一般に名家・大家と目されていたことが分かる。また、根岸党もしくは根岸派が、当時隆盛を極めていた尾崎紅葉ら硯友社と並び称される、文壇の大きな一勢力として認識されていたことも顯然とした事実である。

本研究は、現在では批評・検討されることすらなくなった根岸党の再評価を試みるものである。根岸党の出現から終焉に至るまでを一つの文化現象として扱い、日本近代文学史上のみならず、日本近代における根岸党の位置づけを行う。ここでは、彼らの交遊が如何なるものであったのかを眺めることにより根岸党の性質について論じ、更にはその文化的・社会的背景にまで言及したい。

## —

根岸党員たちは連日連夜のように酒宴を催し、春は品川沖の潮干狩り、夏は荒川の鮎漁といった四季折々の行楽に出かけた。名山を巡り名水を尋ねる旅行会を催すこともあった。また、連れ立って観劇に繰り出すことも多かった。饗庭篁村と親しかった坪内逍遙は「篁村を中心としたメンバー」について、「独酌は毎夕、友が来れば真昼間からでも飲む、折々は伊予紋あたりへ押し出す。其交友の主な面々は劇通幸堂得知、画家高橋応真、高橋太華、岡倉天心（覚三）、画家川崎千虎、森田思軒、中井錦城であった。これを、文壇では、根岸党と呼んで、飲中八仙に擬しなぞした」と記し、『国民新聞』の記者として根岸に出入りしていた内田魯庵は根岸党について「昔の八笑人、七

偏人の生活だつたね、僕が思軒居士をたづねると、お茶の代りに酒が出た。それが朝ばらなんだ。何んのかんのといつて、実によく飲んだものだ」と語っている。黨員や周辺人物が記した著作を始めとして、彼らの酒にまつわる逸話を伝える資料は数多く遺されている。そうした資料により、根岸党がある時期定期的に開催していたことが判明しており、また、彼らの代表的な行事の一つとも言えるのは「飲拔無尽（会）」（「能美努計無尽」とも書く）である。

「飲み抜け」とは、「多量に酒をのむこと。また、その人へのしつていう語。大酒のみ」（『広辞苑』第五版）の意。「無尽」は、無尽講（頼母子講）をかけたものであろう。黨員たちの共同執筆による紀行『草鞋記程』によって、それは、少なくとも明治二十五年頃には月一回の頻度で開催されていたことが分かっている。

幸田露伴は後に根岸党時代を振り返り、飲拔無尽について以下のように解説している。

その名の通り皆で会費を持寄つて痛飲するのが目的だが、ただすこしばかり仕組が異なつてゐた。先づ一同の中から一人の主人と一人の三太夫とを選んで、それにその日の主人公を任せた。三太夫は無論番頭格で、会計万端を引受け、主人は我儘な御前、その他の人は客人、何のことは無い、一種の大名遊びである。御前は我儘警拔なるを以て貴しとなし、三太夫はその性緻密なるをよしとした。ところが往々にして腕の凄い御前の我儘は三太夫の御諫言にも耳を藉さず、とんで

もない処へ客人達を案内させたりした。中には随分卑しい殿様もあつたので、恐しく汚ない場所へ連れこまれることもあつた。

尤も大名遊びと言へば聞えは大変よろしいが、その実質に至つては相も変らず牛飲馬食を本領とした。それでも三十円もあれば三太夫の腕一つで、十人位の人数なら一夜の豪遊を購い得たもので、その点三太夫は大に見せ場のある役柄であつた。私などが三太夫になると、濫費が甚しいので忽ちの間に殿様を破産させてしまつた。そんな場合、三太夫が自腹を切るようなこともあつた。

同文において露伴は、「この無尽などは、是非今の世の中にも復興させて見たい気がする」と言い、また、自らの著作「珍饌会」は、「この類のもので、多少当時の空気があらはれてある筈だ」と述べている。「珍饌会」とは、明治三十七年に発表された露伴の小説で、その内容を一言でいえば、食通を自認する人々が「珍饌」を持ち寄つて楽しむ会を催すも、「珍饌」が過ぎて皆で苦しむというものだ。露伴との江ノ島、鎌倉巡りの模様を描いた篁村の紀行「女旅」（明治二四年）では、世間一般にいう「通」に對置させて、「常に我々が用ふる通字は即ち失策多き事にて不通といふべき不の字を略したるなり」と、根岸党における「通」が定義づけられているが、通を氣取り、得意顔に人のしないことをして見せ、最後には失敗に終わるといふパターンは、根岸党の遊びを作品化したものにおける典型的なものであり、また、篁村・露伴などが後に根岸党時代の逸

話を語つた回想にも多々見られる。おそらく、それは完全なフイクションという訳ではなく、実際の彼らの遊びの場で度々みられたものであつたのだろう。

飲拔無尽と並び、根岸党における二大行事の一つとなつたのが「二日旅行（会）」である。黨員数名による旅行は明治二十年前後より行われていたと見られるが、明治二十五年になると、彼らは二日旅行と呼ばれる比較的大規模な旅行会を催すようになる。前掲の『草鞋記程』により、こちらも少なくとも当初は月一回の割合で開催されていたことが分かつている。

二日旅行は、名前の通り一泊二日のものもあれば、後に記す月ヶ瀬旅行のように往復一週間を要したものなど、日数、行き先などは様々である。また、前もつて何かしら趣向が決められていたものもあり、例えば、明治二十五年五月に行われた第一回目の二日旅行の趣向は、「昔の旅」であつた。旅の行程は、現在の京成電鉄の沿線である市川の真間・国府台から八幡・中山を経て船橋で一泊するというコースで、参加者は篁村の他に、幸堂得知・須藤南翠・森田思軒・関根只好・高橋太華、それに久保田米偲が加わるはずであつたのが不参となり、岡倉天心が愛馬に乗りあとから馳せつける。

当日の朝、篁村宅に集まつたのは「さながら武者修行が山賊妖怪を退治するといふ意氣込。それゆゑにや身形も山神の祠に昼寝し荒野に野宿せんばかりに勇まし」い面々。旅の趣向に合わせ、「二日の路用各々金一円を會計係へ差出し、其他決して一銭たりとも隠し持べからざる事」「時計並に金指輪すべてめかし飾りかたく禁制。入齒といへど金は相成らず候事」「車に

乗るべからず、馬籠とも無用のこと」という「三章の法」が定められ、会計係りには只好、その「助役」として太華が選ばれた。

後に根岸党で通行する「テレコ献立」(「テレコ詠え」ともいう)が初めて用いられたのは、この旅である。篁村はこの旅の紀行「二日の旅」に柴又の帝釈天門前でとった昼食について、「実を明かせば会計両氏の発明にてテレコ献立といふものにしてなるなり。(略)テレコとは芝居道の通言にて二の狂言を採込に演る事にて、即ち此にて六人の中へ甘煮と鍋を三人前づつしか取らず、それを六人で両方へ箸を入れるにて是を名づけてテレコ詠へといふなりと苦しい発明もあつたものなり」と記し、それがこの旅の経費節減のため、会計係の太華と只好により考え出された策であつたことを明かしている。飲食店におけるこのような注文の仕方は、現在では必ずしも珍しい方法ではないが、当時においては状況が違つたのか、篁村は「始聞たる時には情なく思ひしが後にて思へば名案なり。看客諸君三四人以上の連にて其場合によりては此法を用ひ試み玉へ」と読者に「テレコ献立」を推奨している。<sup>5)</sup>

## 二

「徹頭徹尾世の中を洒落のめして、四角四面なことは大嫌ひ、飽くまで江戸ッ子流に、人をアツと言はせて面白がる底のいたづら気を持ち合わせて」おり、「何処までも洒落れてみようと言つたやうな調子、物を苦にしない調子は、決して尋常の人に

出来る芸当ではなかつた」と言われる饗庭篁村は、多くの著作においてその洒落つ気を存分に發揮しているように見える。しかしながら、現実の交遊の場における彼はそれ以上であつたらしく、坪内逍遙は篁村について、「君の滑稽の才は全く天成であつたのだから、それは寧ろ其不用意な際に於て、却つて最も巧妙に發揮せられた。今になつて思ふと、君が酔時の秀句や戯謔や諷刺や冷罵の幾分かを速記しておかなかつたのが惜しい」と振り返り、また、篁村・逍遙と同席することも多かつた嵯峨の屋おむろは「篁村は如何にも品格の有る、大店の旦那らしい風采の人で有つた。如何にも者静かな、がらがらとはしゃがない富人の江戸つ子といふ風の人で有つた。酔つても騒がない、唯酔へば洒落をいふ、其が奇麗な滑稽を含む秀句となつて現はれる。其だから笑はずには居られない。然し奇麗で軽妙だから、羽目を外しては笑へない。其滑稽は軽快洒脱の妙を極めたもので有つた」と記すなどしている。そんな篁村を筆頭に、根岸党には「ダース二ダースと洒落を吐き玉ふ」者たちが勢ぞろいしていた。

「彼等を一党一派と團結させたのは、文学上の主張でも主義でもない、むしろ酒であつた。詩酒徹逐の遊樂であつた」とも言われる根岸党だが、酒と並んで彼らの交遊を彩つたのは洒落や諧謔である。根岸党の交遊がいかに洒落つ氣に満ちていたかは、黨員間で交された書簡はもちろん、紀行文や歌舞伎の合評などの著作にも随所にあられてはいるが、ここでは彼らの間で通行していた表徳を例としてみてゆく。

根岸党では、一人称を「三太夫」、その他を「御前」とし、

あるいは、党内つけた表徳を名乗り、互いにそれで呼び合っていた。表徳は幾通りもあり、その一つに縮めて呼び合うものがある。篁村の「二三の思ひ出」によると、それが起つたのは明治二十三年前後、根岸党内で詰言葉が流行した時で、「此の急速な世の中に、のんびんぐらりと互の呼称などを長く云ひ合つて居るのは愚だ」という「誰やらの発明」によるものであったという。この方法に従えば、饗庭篁村は「アバコソ」、森田思軒は「モシタケ」、幸田露伴は「コタロハ」になる。塩谷賛氏の『幸田露伴』には、ある者が中西梅花の号である「梅花道人」を縮めて「バカドジ」と呼んで皆を笑わせたというエピソードが紹介されている。一方、それに反旗を翻したのが黨員たちとも親しかつた福地桜痴で、思軒を「タゴゴロのクルマボシ先生」、春鶯亭を「ウグイスのハルのヤドリ」というように呼び、「皆の気を焦せ」たこともあつたようだ。ちなみに、このエピソードには、次のような続きがある。天心は「畢竟言語といふものを用ふるから、長短論も起るのだ、言語は未なり、人間直ちに香世界に住して、無言にて意味の通ずる様にすべし」と、篁村と「無言応酬の稽古」に取り掛かつた。天心の妻や、ちょうど天心宅を訪れた川崎千虎もまじえて修練した結果「腮あきをうごかさずだけで、すべてが弁じ」るようになった彼らは、「先づ他流仕合をしてその実果を試みん」として、箱根の馴染みの宿を訪れる。宿では「すべて無言で、腮あきつきだけで命じ」たが、「女中達も心得たりと気を揃えて、調子よく何でも弁じたので」一同は「大満足」。翌朝、篁村が酒とともに松魚の塩辛を「顔色で命じ」たところ、黙つてうなづいた女中が持つて帰つて来た

のは何故か「洋杖を一抱へ」。一同は「禁を破つて絶倒し」た。話には更に落ちがあり、天心はその杖に漆をかけて「我党の杖にして世を驚かさう」と買つて帰つたところが、漆かぶれのために四、五日寝込んでしまつたのだという。篁村は「天心先生に此の類の話は尽きぬほど有るが、皆僕が一味に加はると、いづれも失策ばかりなり」とこの文を締めくくっているが、ここにも飲抜無尽のくだりで紹介した根岸党の「失策」のパターンが現れている。

話を表徳に戻す。明治二十六年四月に行われた伊勢から月ヶ瀬への旅では互いに「愚名」を付け合っている。新橋から汽車に乗つた一行は、夕方興津に着き、同地で一泊することになった。その晩宿で酒事をしてゐる時のことである。篁村の紀行文「月ヶ瀬旅行」によれば、「此行は日々新聞にも日本一の氣障きざど共がと称へられし程なれば、親の付けたる名を戯あざわに呼ぶは無慚」であるから旅行に参加した黨員八名の「得意の表徳」を選ぼうということになった。一同は、「舜の八元か、周の八土か、乃至は飲中の八仙か宋の八君子かいづれに依るべき。但しは坂東の八平氏、熊野八庄司によそへつべきか、八犬士か八笑人か八大龍王か八天狗かと働らきを見せ合しすゑ、先づ兎も角も馬鹿阿房の意味ある字を残らず集めて、其中より適當なるを選取る事にすべし」と話が決まる。思軒・太華・露伴は「内典外典東西各国あるとあらゆる馬鹿の字を搜り出したる」が、「愚」や「味」のように一字では呼びにくい。「他人が聞いてもいかにも其人の名の如く思はるる日本製の名」を付けようと、「またまた智囊ちぶくろを絞り直」し漸くその名が決定、「命名式」が執り行われ

た。この旅の二日目以降、紀行「月ヶ瀬旅行」はすべて「愚名」で記述されていく。篁村が「涙ながらに與太郎を頂戴」したと以外に、どの表徳が誰を指すかは明記されてはいない。ただし、よく読むとそれが分かるように書かれており、読者は推理を楽しむながら読み進めることが出来る仕組みになっている。ちなみに、「月ヶ瀬旅行」に記される「太郎作」は得知、「抜作」は思軒、「兵六」は太華、「三太郎」は露伴、「甚六」は海運、「猿松」は只好、「鈍太郎」は永洗を指す。当時大阪朝日新聞社に勤務していた須藤南翠は、三日目に古市で合流し、「直に一行より東四郎」の名を贈られた。この旅行が行われた時期、久保田米遷は、シカゴ万国博覧会見学のため渡米中であつたが、米遷が帰国した翌年の三月には、旅行不参加により「愚名」の列に洩れた彼のために「命名式」が開催されたことが、遺された会誌から分かっている。同会では、「三太郎」と「兵六」が「第一幹事」となり、米遷の名は名付親「與太郎」により「頓八」と命名され、「証書を認めて与」<sup>15</sup>えられた。

### 三

こうして彼らの表徳の付け方一つをとってみても洒落っ気のみちた根岸党の雰囲気を感じ取ることが出来る。ところで、根岸党にみられる著しい遊戯性は、どこからきているのだろうか。筆者は、根岸党の持つそうした性質は、単に黨員個々人の性情によるものとして片付けるべきものではないと考えている。出口智之氏は根岸党について、「彼らの文学は、日常から解放さ

れた遊びの空間に成立したが故に、苦悩や煩悶とは切り離された、純粹におもしろい作品を完成させた。そのユーモアは今日的に見ても十分評価に値するものであり、かかる文学を生み出した根岸党と、新聞に陸続として掲載される彼らの文学を支持した明治二十年代という時代の性格は、あらためて見直されるべきであろう」と指摘しているが、根岸党の遊戯性が有する社会的・文化的背景について考察することは、出口氏が提起する「明治二十年代という時代の性格」の「見直」しという課題に向き合うとき、有効な手段の一つともなるだろう。以下に、それを考える上で材料となり得る事象を二つ挙げる。両者はともに、黨員の何名かが参加しているものの、党外の者が主催したイベントである。

一つ目は、明治二十三年二月に根岸で開かれた「大福引」である。この会については、招待客の一人であつた篁村が『東京朝日新聞』でその模様を伝えている。それによれば、同会の参加者には篁村の他に、根岸黨員の川崎千虎と幸堂得知とがいた。会場となつたのは篁村の「下屋敷の真向」にあつた「無音社」で、その庭には「出揚の天麩羅店」があり、「大福餅屋の屋台を借りしと見え兩障子は大福の二字筆太に看板書が見知らせあるを何人か外道智を運らし大の字の上へ炭を結び付け天の字とごまかし」であつた。篁村が「大福引の催しに大福の屋台とは取合面白きには思ひし」と記していることから、それが単なる間に合わせに借りてきた屋台ではなく、「大福引」に「大福」をかけるという洒落を効かせた趣向であつたことが窺える。「大福引」と言つても、現在一般にみられる福引とは異なる

## 根岸党の性質

もので、この会の参加者には前もって六種の兼題が与えられ、彼らはそれにそって何か物を用いた洒落を考えて来なければならなかった。当日は読み上げ役が皆の前で各人の作を発表、洒落の作者はその出来ばえに見合った景品を渡されるという趣向である。この会の「読上げの役」を任されたのは得知で、彼は「弁にまかせ思ひ付を加へいと面白く披露し」、「読方よきたま上のお実に入るもあり、無理は無理ほど可笑くコヂツケは附会だけ興ありて一品ごとにとットの販ひ」であった。出品されたものには、「弁慶といふ題に今はやらぬ盆を出し昔し益(武藏坊)」という「苦しみ」ものや、「浅草観音といふに金龍山(浅草寺の山号)——引用者註」といふ銘の茶を無理に拵へさせて是に帯を添へ観音様のお茶と帯(御茶湯日)」というもの、「小説家といふに壺の中へ郵便葉書を入れ坪内郵送」というものもあったという。また中には、「博士といふに鶯餅は羽風に散らす縁語を引き」、「吉原といふに純金の磁石は北へ吸寄せる謎々」といった難解なものもあったようだ。「其外数百の名趣向」に「皆々笑ひ草臥し頃」「此の中の騒ぎ愈々盛んとなり」、千虎は「七福神の狂言」を、得知は「芸尽し」、また「御前方が鼻消の一曲芝居事などさまざまあり」、会は大盛況のうちに終った。

この会の主催者は誰であったのか、また会場となった「無音社」とは如何なる組織なのか、また根岸党員以外には誰が参加していたのかは不明である。しかしながら、篁村が紙上に記した以外にも「数百の名趣向」が発表されたというから、多数の参加者がいたことが窺い知れる。こうした「福引」は、少なく

とも明治中期には通行した催し物であつたらしく、鶯亭金升の明治三十三年一月四日の日記に、「株式取引所より招待を受け同所へ出張し、夫より浜町岡田の株式新年会へ出席。席上にて鼠づくしの福引を選ぶ。(総数百余)」とあり、続けて「一等ますおとし(増もお年・枳落し) 寿杯一個」「二等 鼠ごっこ(手袋を四つかさねる)」「三等 鼠なき、うれしい便り(書翰箋)」以下二十等までの当選作が挙げられ、「右二十等迄へ反物、時計等の商品を贈られたり」と記されるなどしている。ちなみに、金升は根岸に住み、根岸党員たちとも親しくしていた。

根岸党の活動期に行われた遊戯性に満ちたもう一つの催しは、明治二十六年十一月に入谷で行われたその名も「しやれ会」である。この会については『東京朝日新聞』がその開催を以下のように予告している。

伊東専三氏会主となり来月十二日午後一時よりおそれ入谷の鬼子母神即ち真源寺本堂に於て「しやれ会」といふを催す。其の兼題は(恐れ入谷の鬼子母神)(どうで有馬の水天宮)(しやれの内のお祖師さま)にて、当日直々に被講秀逸の部ハ額面に記載し鬼子母神の宝前に掲げて尽未來までの記念にするといふ。判者ハ幸堂得知、落合芳幾、南新二。又当日席上の余興ハ、当世洒落娘(柳家枝太郎) 舶来洒落手品(春天高柳一) 三題洒落語(柳亭燕枝) 会費ハ一名金五十錢にて酒飯を馳走するよし兎に角洒落た催しなり。

右の記事により、この「しやれ会」もまた、前述の「大福引」



と同様に、予め参加者に兼題が与えられ、当日はその兼題に沿って各々が持寄った洒落を競い合うという趣向であったことが分かる。ちなみに、会主の伊東専三は、もと浅草の菓子店船橋屋の主人で、大蔵省にも勤務したが、後に仮名垣魯文に入門し、『仮名読新聞』・『有喜世新聞』・『絵人自由新聞』などを転々とした人物。「判者」に名を連ねているのは、根岸党員の得知の他に落合芳幾と南新二の全三名。芳幾は歌川国芳門下の浮絵師で一恵齋芳機・歌川芳機とも号し、明治五年創立の『東京日日』の幹部で八年には『東京絵入新聞』を創刊、『歌舞伎新報』も主宰した人物。南新二は、もと幕府の御教寄屋坊主で明治期になって『東京絵入新聞』・『東京日日新聞』・『やまと新聞』などの記者になり、得知と並ぶ滑稽小説の名手でもある。「席上余興」をするという柳家枝太郎はこの後すぐに柳亭左楽を襲名、柳亭燕枝は談洲楼燕枝。さらに、この新聞記事に名前が出ていないが、先に述べた鶯亭金升の日記にこの「しやれ会」についての記述があり、彼もまたその参加者の一人であったことが分かる。金升は、同会で「点の入った」作として、「洒落の内のお祖師様を洒落た『暴れの後のお星さま』何うで有馬の水天宮を地口つた『京で秋なら通天橋』」の二つを挙げ、さらには「幸いにそれは二つとも僕の作であつたので、青二才の鶯亭ニコニコして帰つた」と記している。

このように、根岸党の活動期には、まるで歌会や句会の如く、言わば「洒落会」というべき、ある意味戯けた催しが存在していたのである。こうした「大福引」や「しやれ会」の存在したこと、そして、中新聞として確乎たる地位を築いていた『東京

朝日新聞』がそうした会の予告記事を載せるなどしているという事実は、根岸党が持つ著しい遊戯性が、彼ら固有のものではなく、当時の社会一般がそうした雰囲気を持ち合わせていたことを示す一つの傍証となるだろう。実際に当時の紙面を調査してみると、明治十年代の終りから三十年代にかけて、洒落をこらした趣向を競う催しを報じる記事が散見される。『読売新聞』から例を挙げると、「団々珍間の投書家諸子が発起」した「洒落の大会」である「滑稽珍陸会」（明治一八年五月二四日開催）、「呑気会員」による「忠臣蔵見立」の「遊食会」（明治二六年二月二四日開催）、「東京名所の課題に因み趣向せし品を」持ち寄る「遊食一品会」（明治三六年三月一六日開催）、「梅幸百種」を兼題にした「浅草新福富町の笠仙事橋本仙之助が企てたる一世一代名残の遊食会」（明治三八年二月一三日開催）などがある。また、その他にも当代においては、『洒落哲学』・『風流洒落酒茶戦場』・『滑稽洒落演舌会』・『風流三味洒落道場おもしろし』など、「洒落」や「滑稽」をその名に冠した書籍が多数出版されていたことは確かである。

明治へ江戸の匂いを伝えていたものは、何といっても「洒落ッ気」ということでした。(略) そうしたのんきさが「洒落ッ気」といって、江戸の文化文政度から明治の初年に伝わり文明開化の欧米風に反抗したものでした。反抗したというと、大袈裟ですが、なろうことならチョン番あたまに、上下でもつけて、こうしたのんきな旧幕の風俗を、形式にも精神にも維持しようとしたことが、私どもはハッキリと眼に残っ

ています。

その『洒落ッ氣』が残した文献は沢山ありますが、まずこうした人々は寄ると障ると、洒落文学になって、三、四人集まると、口上茶番だとか、即席三題斷だとか、ソレは洒落ノメしたものです。江戸伝来の型があつて、洒落であつて真剣なものでした。『洒落が一つ解らねエ玉』といつて。相当学問あり、智識階級の人物であつて、洒落が解らないと、糞味噌にあげせかけて馬鹿にしたものです。そのかわりこの仲間に入つたら、三馬一九の洒落本の暗誦ぐらいしていないと、飛んだ恥を搔いてしまいます。なかなか高級の洒落があつて、解釈に骨が折れました。和漢の文学、滑稽、逸話珍話に通曉していないと、お相手が出来ない。洒落ッ氣もまた哲学の一つで、そう馬鹿にしたものでもないんです。『口上茶番』が随分流行りまして、十人寄れば「サア口上茶番だお作んなせい」といわれ、苦勞したものです。余興にはいつも下がかつた連句とか、狂句とか、落語とか、洒落とか實際奇才天才がなくなつては、この仲間に入つてらんないんです。

マアあの時代（明治三十年頃まで）は、洒落ッ氣の世の中でしたよ。

右に引用したのは大正六年刊行の篠田敏造の聞書集『明治百話』の一部である。残念ながら同書では、話者の氏名および聴取年月日が明らかにされていないのだが、これなども根岸党活動期における社会が持つ遊戯的な雰囲気の文化的背景を考察する上で非常に興味深い資料である。「相当学問あり、智識階級

の人物」であつても、「洒落が解らないと、糞味噌にあげせかけて馬鹿にした」とあるが、裏を返せば、知識人の中にも洒落に精通し、「口上茶番」や「即席三題斷」などに参加した人々が少なからず存在したということを示している。後の時代にはその点に言い及ぶものはいなくなつたが、根岸党もまた知識人の集団としての一面を有した。例えば、黨員の高橋健三は、教育・文学・美術・演劇等についても造詣が深く、専修学校・東京法学院・東京文学院・東京英語学校・東京商業学校等の設立に尽力したばかりか、自らもそこで教鞭をとつていた当時における第一級の知識人である。彼は明治二十二年に官報局長に就任するが、当時の官報局は、官界の中で最も自由な氣風がみなぎつており、それは局長の性格によるところが大きかつたと言われる。多くの人々が伝える回想から、性剛毅にして清廉潔白、謹厳実直といつたイメージの強い高橋健三だが、そんな彼でさえ、明治二十三年にフランスへの旅先から留守宅に「藤田、岡倉阿氏も不相變健康とは存候得共、酒量は追々節減致候様、是も時々御忠告被成度候。駄洒落は別に健康に害なきのみならず、却て撰生に相成可申、勉強可致、船中にも追々名洒落有之候得共、聴人無之、往々犬死致候は残念千万なりと御伝言可被下候」と書き送るなどしている。近代における知識人たちの交遊の性質も時期に応じて変化していったのであろうが、「洒落ッ氣の世の中」における知識人と、後に夏目漱石が小説「こころ」や「行人」に描く、孤独で陰鬱な近代の知識人像とは大きな差があるように思われる。ともかくも、根岸党に見られる著しい遊戯性が、黨員個々人の性情によるものとばかりは言えないこと

が分かるだろう。さらに言えば、少なくとも根岸党の活躍期である明治中期において、「洒落つ気」は一つの哲学とも言うべきものであり、「明治へ江戸の匂いを伝えていたもの」という、社会的・文化的背景を有するものとみることも出来るのである。

## おわりに

根岸党は明治三十年代を通して緩やかに終焉するに至るが、それと同時に「洒落つ気」は「不真面目」なものとして文壇から排除されてゆく。日本近代文学の確立は、明治四十年前後、日本自然主義文学によるというのが文学史の定説であるが、その自然主義文学が如何に「嚴肅」なものであったのかは、あらためて言うまでもないだろう。同じ頃に枠組みが出来上がった「日本近代文学史」においてもまた、文学における遊戯性は軽視された。

現在通行する文学史において、根岸党乃至は根岸派の名称はもちろん、露伴以外の根岸党文士の名前を——明治文学の一時代を築いた饗庭篁村の名前ですら——目にすることはまずないだろう。根岸党の興亡を眺めることにより見えてくるのは、日本の文学が近代化の中でかかえねばならなかった「ゆがみ」であり、「江戸」が「東京」へと変貌を遂げる過程でもある。根岸党と彼らをとりにまく文壇及び社会の変化について考えることは、江戸と明治との連続性を捉える上で大きな意義を持つばかりでなく、日本近代化の新たな一面を明らかにすることにもつながるだろう。

## 註

(1) 坪内逍遙「柿の蒂」、『芸術殿』第三巻第一号(昭和八年一月)

一五頁。

(2) 白石実三「根岸派の人々」、『日本文学講座』第一巻(昭和九年、改造社)中(二三三頁)で紹介されている白石氏が魯庵から直接聞いた言葉。

(3) 幸田露伴談「遅日雑話」、『文章倶楽部』昭和三年三月号。テクストとして使用したのは、『露伴全集』第三〇巻(昭和五年、岩波書店)三二三頁。根岸党が催した行事や、交遊の場で行われた彼らの遊びの手法には、本文に挙げた飲抜無尽、テレコ献立のように党内で編み出された独特の呼称があった。露伴は同文において、根岸党の酒宴の二次会などでたびたび行われた「チャロク鍋」について「川崎千虎の茶六大人(千虎の別号——引用者註)の発明にかかる。調理法は至極簡単、杯盤狼藉のあと掃除で、残った代物を何でも鍋へ投げこむ、それでいいのだ。『チャロナでもう一杯行かう』などと云つたもので、二次会の下物はこれに限つたものであつた。チャロナは蓋し茶六鍋の略であつた」と紹介している。

(4) 饗庭篁村「女旅」第二回、『東京朝日新聞』明治二四年三月八日、第二面。

(5) 以上、すべて饗庭篁村「二日の旅」、『東京朝日新聞』明治二五年五月一日〜一七日。テクストとして使用したのは、篁村の紀行を集めた『旅観』(明治三四年、博文館)。

(6) 幸田露伴談「明治文壇雑話」、『日本文学講座』第一五巻、昭

## 根岸党の性質

和三年、新潮社。テクストとして使用したのは、前掲の『露伴全集』第三〇卷三〇〇頁。

(7) 坪内逍遙「饗庭篁村君の追憶」、『演芸画報』第九卷第八号(大正一一年八月)二四頁。

(8) 嵯峨の屋おむろ「春廻屋主人の周囲」、『早稲田文学』第二三二号(大正一四年六月)二二頁。

(9) 幸田露伴「乘興記」、『大阪朝日新聞』明治三三年五月一八日～六月五日。テクストとして使用したのは前掲の『露伴全集』第一四卷七七頁。

(10) 柳田泉「幸田露伴」(昭和一七年、中央公論社)一七三頁。

(11) 中根岸の音無川畔にあった料理店で、根岸党の「牙城」の一つ。天ぶらの一種で衣に鶏卵の黄身を使った「金ぶら」が名物で、日暮里との境の高台にあったため、晴れた日にはその座敷から、根岸、三河島村一円の田圃を通して筑波山が眺められたという。

(12) 以上、すべて饗庭篁村「二三の思ひ出」、『天心先生欧文著書抄訳』(大正一二年、日本美術院)。

(13) 以下、すべて饗庭篁村「月ヶ瀬旅行」、『東京朝日新聞』明治二六年四月五日～五月一〇日。テクストとして使用したのは前掲の『旅観』。

(14) 以上、すべて「明治二十七年三月十六日会誌」。テクストとして使用したのは、前掲の『露伴全集』附録八〇頁。ちなみに、明治三十三年に『新小説』に連載された露伴の「当流人名辞書」には、愚人を指す名前として「ぬけ作」、「兵六」、「三太郎」、「甚六」、「鈍太郎」が、「何事をも能くは会せぬに、

おのれは何事をも心得顔に振舞ひて、ややもすれば人の笑を惹くものをいふ」名前として「猿松」が、「虚言家」を指す名前として「與太郎」が収録されている(前掲の『露伴全集』第四〇巻)。

(15) 出口智之「根岸党の文学空間」、『国語国文』第七五卷第六号(平成一八年六月)四五頁～四六頁。

(16) 以上、すべて饗庭篁村「大福引」、『東京朝日新聞』明治三三年二月一日、第二面。

(17) 『鶯亭金升日記』(昭和三六年、演劇出版社)五七頁～五八頁。「しやれ会」、『東京朝日新聞』明治二六年一〇月二六日、第三面。

(18) 前掲の『鶯亭金升日記』三二五頁。

(19) 篠田敏造『明治百話』、大正六年、四條書房。テクストとして使用したのは、岩波書店版(平成八年)二五七頁～二六一頁。

(20) 高橋健三明治三三年二月二日付書簡。テクストとして使用したのは宮川寅雄「岡倉覚三と高橋健三」、『国華』第八三五号(昭和三六年一〇月)四三八頁。

(21) 明治七年、文選工として『読売新聞』に入社した篁村は、校正係、記者へと出世、新聞界の転換期にあたる明治二〇年前後には、『読売新聞』の「事実上の編集総務として巧みにかじをとり」、社務のかたわりに自身の小説を次々に連載、また劇評、書評も書くという社の「大黒柱的存在」(『読売新聞百年史』、昭和五一年、読売新聞社)となっていたと言われる。明治二二年一月には「国民之友」「時事」欄に「篁村

宗」と題して「言文一致の流行稍熄んで、篁村宗將に弘布せられんとす、篁村宗とは何ぞや、饗庭篁村先生の文脈是なり」という短評が載り、更に同年から翌年にかけては二〇巻にも及ぶ著作集『むら竹』（春陽堂）が刊行されている。もちろん、日本の出版史上におけるこうした大規模な個人の著作集は前代未聞のものであった。このような事実からだけでも、当時における篁村の人気の高さは窺えるだろう。

※本稿で扱う人物は、複数の号を持つものが殆どであるが、便宜上、現在最も代表的であると考えられる単一の号で表記した。

※本稿における資料の引用については、原則として旧字や句読点、踊り字を現在通行する字体に改めた。総振り仮名またはそれに近いものについては、筆者の判断により適宜割愛し、句読点がないものについては、筆者の判断により必要に応じて補った。

（たかはし すみこ・二〇〇八年度国際日本学インスティテュート博士課程修了）